field

歴史的環境生成とその衰退化問題

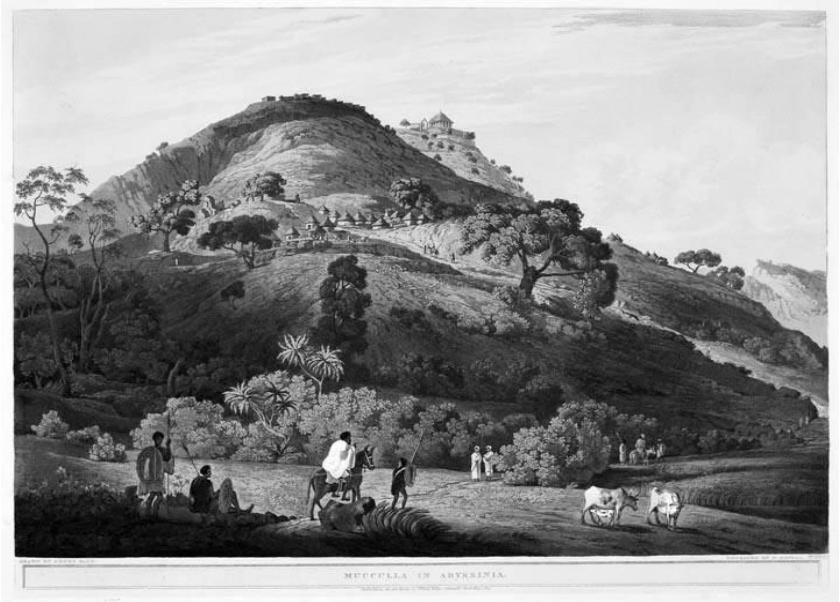
メケレ中心市街地の実態

岡崎瑠美

◆はじめに

中心市街地の衰退化問題は，欧米や日本等の先進国で広く指摘され，その克服に向けて多くの研究がなされているが，人口増加と貧困が同時に進行する発展途上国では,十分な都市計画を欠いたまま,夥しい数の低所得者が流入することによってはるかに深刻な問題が起こっている。

筆者はこれまで歴史的な背景を有する発展途上国の都市を対象として，歴史的街区を構成する中心市街地が陥っている危機的状況を遺産学，都市社会学的な視点から解明し，その改善の糸口を探ることを研究テーマとしてきた。歴史的街区の劣悪化は，たとえばかつてのバルセロナに見られたバリオ・ゴティコが売春や麻薬取引の温床となったケースなどが指摘されるが，発展途上国においても同種の傾向が見え隠れしている。ユネスコの世界遺産に登録された都市が５件に上るエチオピアの場合も，歴史都市の中心部で売春がはびこり，住民の多くはその日暮らしのインフォーマル経済に支配されている。その結果として，遺産の不良住宅化，所有区分の不明確化などが起きている。



ヘンリー・ソルトによる銅板画，1806年

◆古都メケレ

エチオピア北部ティグレ州の州都メケレは，19世紀後半に時の皇帝ヨハンネス４世の宮殿が造営され，臣下がその周囲に移り住むことで成立した都市である。それ以前のメケレには９つの村が存在し，辺り一帯にはいくつもの川が流れ，豊かな緑地が広がっていたとされている。現存するメケレの最も古い絵である，19世紀前半にイギリスの

探検家，ヘンリー・ソルトにより描かれた銅板画には，当時のメケレの風景が詳細に描写されており，現在の乾燥したメケレとは全く異なる風景が描かれている。肥沃な土地を求めて移住した皇帝ヨハンネス４世が築いたメケレはその後，政治や経済の中心を担う都市へと発展し，19世紀後半の市街地形成の基となった。さらに1930年代のイタリア占領政府によるニュータウン建設が，今日の市街地の基本をかたちづくった。

◆メケレ中心市街地の都市空間

メケレの中心市街地を歩くと幾つもの立派な組石造建築の邸宅が建ち並び，それらがかつて重臣たちが居住した建物であることに気付かされる。メケレはエチオピアの中では稀な宮殿中心の都市構造を有しており，歴史は新しいとはいえ，旧貴族層の住宅など，その当時からの遺構が市中心部を占め，都市景観としてもすぐれている。

メケレの都市空間の最大の魅力は，非常に高い組石造技術に裏付けられたヒドモウと呼ばれるティグレ特有の建築様式が織り成す「石」の景観である。

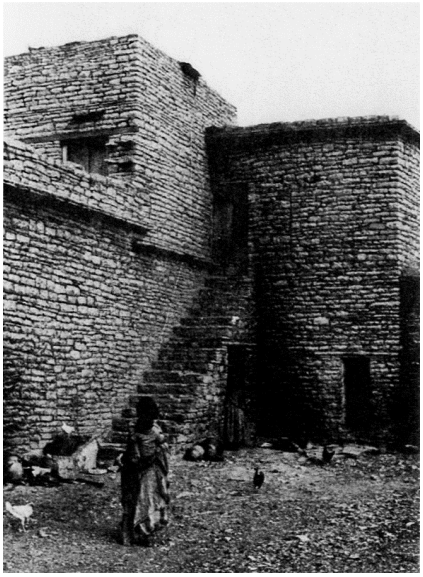
筆者が調査を行ったメケレ中心市街地の歴史地区の１つ，ケベレ14地区では全体の77％が組石造，16％がチッカ，３％がコンクリートであり，組石造の建築が圧倒的な比率を占めていることが明らかになっている。また建築の建設年代別に見てみると，皇帝ヨハンネス４世の時代に建てられたものが17.4％，イタリア占領期及びポストイタリア占領期に建てられたものが23.2％と，古い建築が多く現存する。中には雨漏れ等の理由により修復を必要とする建物も存在するが，多くは建設当初と変わらぬ状態を維持している。

◆住民の特徴

メケレの歴史地区の住民の特徴を洗い出すためにケベレ14地区のうちの４街区を対象に，悉皆調査を行った。188世帯中145世帯が回答し，有効回答率は84％であった。

性別と年齢

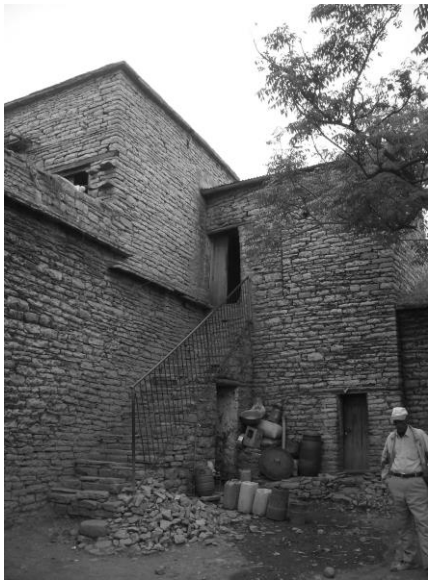
対象地区における世帯主の75％は女性である。最年少は18歳（売春婦）であり，最高齢は86歳（借家経営者）であった。高齢層は未亡人が多く，若年層はシングルマザーが多い。対象地区には男性不在の世帯が多く，男女比に不均衡な結果をもたらしている。また年齢層は10代から80代にわたり，世帯主の半数以上を20代～30代の若い年齢が占める。



ケベレ14地区の
組石造建築

←1967年スウェーデンチーム撮影

2009年筆者撮影→



「X」の文字が書かれた取り壊し予定の建築，2009年筆者撮影

職業

住民の多くは行商人やショップ経営者などの第三次産業に属する職を持つ。インタビューにより抽出された職業は借家経営者(不動産業)，専門家(NGO，エンジニア，技術者，トレーダー)，公務員(警察，バス事務職)，会社員(秘書，レジ打ち)，ドライバー，ショップ経営者，テイラー，美容師，バー経営者，売春婦，行商人，ウェイトレス，工事現場職人である。最も数の多い職業は売春婦27.6%，二番目はバー経営者14.5%であり，対象地区の４割以上の世帯主が夜の仕事に従事していることが明らかになった。その他主婦11.7%，行商人9.0%，ショップ経営者6.2%，その他31.0%と続く。

収入

収入は月収100ブル(インジェラを売る行商人)から8,000ブル(エンジニア)まで大きな幅がある。145世帯の平均月収は765ブルであり，年収に換算すると9,180ブルである。

この結果については２つの点について着目しなければならない。一点目はメケレが中央政府による集中的な投資の恩恵に与っていることである。メケレとゴンダールを比較するとその差は歴然であり，衰退化するメケレの中心部はゴンダールよりもはるかに平均収入が高いことが分かる。二点目はこの地区が商業地区の中心であることにより，定職に就かない者でも多くの就業機会に恵まれることである。そのためインフォーマルセクターであっても十分な収入を得ることが可能である。

インフォーマルセクターには低所得者層に限らず，高所得者層も含まれるが，その多くは売春婦である。この地区には40人の売春婦が住まい，彼女らの月収は300ブルから1,500ブルである。平均月収は720ブルであり，メケレ市民の平均月収を大きく上回る。最も高い収入を誇る層(上位８%)はエンジニアやトレーダー，美容師，借家経営者などである。外観のイメージとは異なり，この地区の住民は十分な収入を得ていると言える。

住宅の所有形態

145世帯中，27世帯が個人所有(19%)，129世帯が借家(86%)であった。対象地区では貴族の末裔を名乗る４つの世帯が見つかった。そのうち２つの世帯は昔から居住する土地に住んでおり，例えばニギスティ・デスタは皇帝ヨハンネス４世の甥であるラス・ハイレ・マリアム・ググサの子孫であることがインタビューを通じて明らかになった。ニギスティの住む土地はその地区で最も大きく，昔からのコンパウンドの形を維持しているが，建物は何らかの理由により，ニギスティの父が1940年代にイタリアのヴィラ風建築に建て替えている。

借家経営者の住まい方に注目すると極めて興味深いことに気付く。それは彼らが昔からある母屋となる建物には住まわず，増築された部分に住むことが多いという点である。母屋を他人に貸すことにより，収入を得て安定した生活を送る借家経営者が数多く見られる。ニギスティも他の経営者同様に，敷地の中央に位置するヴィラ風建築を他人に貸し，本人は新しく敷地内に増築した建物に居住する。

中心市街地における衰退化問題

ケベレ14地区の調査からは以下の５つの視点を得た。

１．世帯主の大半は女性である。
２．自家保有者は旧貴族層を中心とし，旧宅を借家にしている。
3. 「プロスティチュート・イン・ヘリテージ」現象が顕著である。
４．エリトリアからの帰還者(強制移住者)の「吹きだまり」となる。
５．新規住民の定着率がきわめて低い。

19世紀末から20世紀初頭にかけて貴族の居住基盤として形成された中心部は，インフォーマル経済が蔓延る一方で，旧貴族層が借家経営を営むという奇妙な関係が成り立っている。また急激な経済発展や人口増加により，都市膨張が進行し，歴史都市の枠内でもインナーシティやスラム化など貧困に関わる深刻な問題が起きている一方，中心市街地の地域コミュニティは活発である。

◆新たなマスタープラン

現在メケレ市ではインフォーマル経済を一掃し，商業地区を再建する取り組みが行われている。そのベースとなるのが2009年に策定された新しいマスタープランである。歴史地区である中心市街地に都市の新しい軸線となる道路を計画し，現在10mある幅の道を20mにまで拡幅する。それに伴い現在，100軒以上の歴史的建造物を含む建築が取り壊されており，多くの住民が立ち退きを強いられている。インフォーマルセクターとしての職を失い，政府からの少額の立ち退き金を手に，彼らは一から生活基盤を築かなければならないのである。

◆今後に向けて

メケレ大学では2008年より三宅理一を中心にInstitute of Paleo-Environment and Heritage Conservationが設立され，自治体と共同で歴史的な都市や建築の調査研究に着手している。筆者もそこに参画してメケレ研究を行ってきており，フィールドワークを通して都市や村落の実態に触れ，住民とのダイレクトな対話によって体験的にその生活の理解に努めた。とくにエチオピアの場合，環境の劣悪化が進行する一方で強固な地域コミュニティが存続しており，それが地域の持続性の要となりうることに着目している。遺産の価値を建築的側面からだけではなく，社会的文脈で把握し，住民を含めたアクションプランを起こして行くことが必要不可欠である。

（おかざき・るみ／フランス国立科学研究センター）